

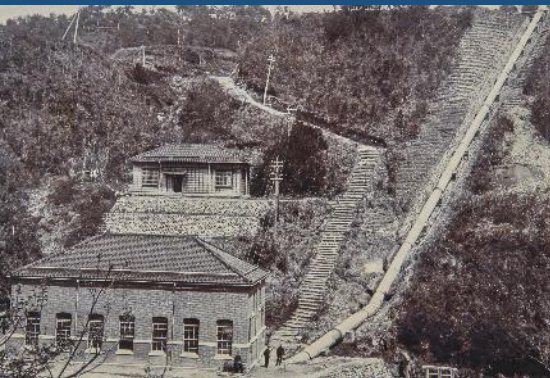
市長が企画した金沢市営電気顛末

北陸で初めてアーク灯による電灯が点灯したのは金沢市の戎座で1893年（明治26）10月9日でしたが、金沢市ではその1か月前、9月8日にすでに金沢電灯が石川県から認可を受けていました。出願したのは森下八左衛門（菓子商）、金丸宅次郎（酒造業）、谷与左右衛門（地主）らで、技術的な検討には得永文雄^{とくながふみお}が加わり、犀川から取水する寺津用水を利用する計画でした。ところが、金沢電灯は1年ほどで事業を中止しました。

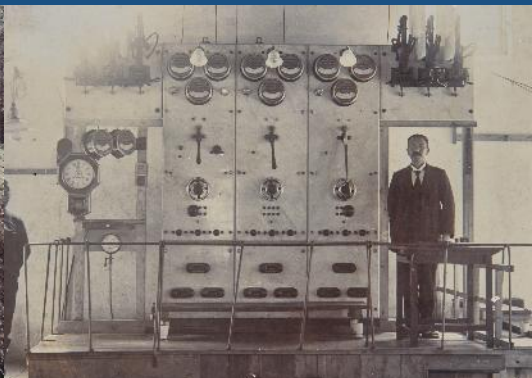
中止の理由は、当時の金沢市長 長谷川準也の介入だったと言われていす。長谷川は地域の産業振興のための市営電気事業を計画しており、彼が議会に提出した「市立発電所を設立する意見」は、金沢電灯の計画を立案した得永文雄の技術的な検討をそのまま流用したものでした。

長谷川の計画は市議会を通りましたが、資金は市債で賄うとしており、その引受けを石川県と旧藩主に頼っていました。ところが、市が起債認可に手間取るうちに、財政事情が悪化した県での市債引受けが困難となりました。この結果、計画を上回る借入金が必要となり、市議会は紛糾^{ふんきゅう}。民営論が台頭し、市営計画は挫折しました。

その後、1898年（明治31）11月に計画は金沢電灯に引き継がれました。その株主に森下、金丸の姿はありませんでしたが、得永が技師として勤務しました。犀川の辰巳発電所が運転を開始したのは1900年（明治33）6月25日。発電機はアメリカのウエスチングハウス社製三相交流120kW 2台、これにペルトン水車200馬力2台がベルトで連結されていました。



金沢電気辰巳発電所全景



辰巳発電所の配電盤と得永文雄

